

目次	■第14回年次大会特集	2
	大会を終えて…2 特別講演…3 プレカンファレンス…4 ラウンドテーブル…5 学際シンポジウム…6 テーマティックポスターセッション…7 特定課題研究…8 石井奨励賞審査結果…8	
	■第15回年次大会（第1報）	9
	■地区研究会報告	11
	北海道・東北…11 関東…11 関西・中部…12	
	■2015年度理事会議事録抄録	13
	第1回理事会…13 第2回理事会…14 第3回理事会…16	
	■お知らせ	18
	地区研究会のご案内…18 Web管理委員会より…20 学会誌編集委員会より…20 事務局より…21 新入会員紹介…22 NL委員会より…23 会員新著紹介…23 関連学会案内…24	
	■編集後記	24

CONTENTS	■Report on the 14th Annual Conference on Japan Society for Multicultural Relations	2
	Overview of the 14th Annual Conference on Japan Society for Multicultural Relations…2 Keynote Speech…3 Pre-conference Workshop…4 Round Table…5 Interdisciplinary Symposium…6 Thematic Poster Session…7 Special Topic Conference…8 The Ishii Yoneo Award…8	
	■JSMR 2017 Annual Conference	9
	■Reports from the Regional Study Meetings	11
	Hokkaido・Tohoku…11 Kanto…11 Kansai・Chubu…12	
	■Records of the 2015 Board Meetings	13
	■Announcements	18
	Announcements on the Regional Study Meetings…18 From the Web Committee…20 From the Journal Editorial Committee…20 From the Business Office…21 Introducing New Members…22 From the News Letter Committee…23 New Publications…23 Other Conferences…24	
	■Editor's Notes	24

多文化関係学会 第14回年次大会（岡山大会）を終えて

大会準備委員会

2015年11月13日から15日までの第14回大会を、充実感と共に無事に終えることができました。これも今回の主役である参加者の皆様と、まわりで支えてくださった多くの方々のおかげと、感謝しております。準備委員と一緒に、大会を振り返ってみたいと思います。

第14回大会には事前登録者70名、当日参加者18名、計88名の方にお越しいただき、35件の研究発表が行われました。初日のプレカンファレンスから最終日の学際シンポジウムまで多くの方々にご参加いただき、活発な研究交流が行われました。学会開催中には小さなトラブルもありました。ティータイムを予定していた教室で、ティータイム開催時間の直前に、その教室のコンセント差し込み口から電気が来なくなり、お湯が沸かせなくなったり、最終日には受付が配置されていたホールの照明が消えてしまい、薄暗い中で受付を行うこととなってしまいました。しかし、大きな事故やトラブルなく、大盛況のうちに第14回年次大会を終了することができました。皆さまの温かいご支援とご協力のおかげです。遠方から、あるいはご多忙の中ご参加いただいた皆様に、心から感謝申し上げます。

報告者：奥西有理(岡山理科大学)

第14回年次大会では、広報を担当させていただきました。重要な役割を仰せつかり不安でしたが、田中先生をはじめ、様々な先生方のご助言・サポートを賜り、大きな混乱もなく無事に終えることができ安堵しております。また、前年度の今野先生に大会HPのプラットフォームを整えていただいていたので、あまりITに詳しくない私でもなんとか使いこなすことができました。次年度のための反省点といたしましては、事前申し込みのご案内をもう少し頻繁にリマインドさせていただければよかったと思っています。また、発

表・大会参加の記入フォームもより分かりやすいように工夫していきたいと思います。次年度はこれらを踏まえ、よりスムーズな広報ができるよう努めたいと思います。最後になりましたが、大会委員の先生方、今野先生をはじめ、大会運営にご協力いただきましたすべての皆様にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

報告者：出口朋美(近畿大学)

第14回大会には、学生さんをはじめ多くの研究者の方々が岡山の地に足を運んでくださいました。全国からおいでくださった方々と共に考え意見を交わす、開かれた学术交流の場を堪能できたことを、何より嬉しく思います。懇親会では合計53名の方が来られ、B級グルメと地酒をお供に岡山クイズを楽しみ、ご当地スイーツの午後と銘打ったティータイム交流会では、地元のお菓子で和みながら、大いに懇談の時間を過ごしました。こうした硬軟両方向から対話を促す仕掛けの中で、それぞれの研究を語り合う場が年次大会だと思います。楽しかった、来て良かったという声を多く聞いたのが、最大の収穫だったと思っています。

限られたマンパワーと古い建物の中で、行き届かないことも多く、ご不便をおかけしてしまい恐縮です。しかし来場者の方々からも、何かできることはありませんかというお声をかけて頂き、そのお心遣いに温かな気持ちになりました。大会は実に多くの方に支えて頂きました。今回はアルバイトがおらず、ボランティアの学生さんたちは、共にホストをする意識で真剣に大会を支えてくれました。地域のコンベンションセンターからは袋や桃太郎の飴などを頂戴し、交通の配慮もして頂きました。地元の酒店から地酒のアドバイスをもらい、生協レストランはいつもよりずっと融通を利かせてくれました。大会開催の経験者からも多くのアドバイスを頂きました。

準備委員会は、岡山県内からは奥西有理先生

(事務局)、添田正揮先生(プレカンファレンス、特別講演)、私の3人のみで、他は九州の松永典子先生(プログラム)、島根の大谷みどり先生(広報)、大阪の出口朋美先生(広報)、八島智子先生(ラウンドテーブル)が参加して、主要な業務を担ってくれました。加えて東京の武田礼子先生(ラウンドテーブル補佐)と姫路のシミッチ・ミラ・山下先生(ラウンドテーブル補佐)、京都の畠中香織先生(ティータイム)が、企画を担当してくれました。いわばバーチャル委員会状態だったと思います。開催業務をできるだけシステム化していけば、こうして会員数が少ない地方でも大会ができる、という昨年度からの大会スタイルは、本学会の貴重な経

験になっていると思います。大会中には引き継ぎ会合を行い、大会後には振り返りメモを付けた開催資料をパックにして、今後2年間の大会委員にお渡ししています。さらに一部委員は留任し、他の今年度委員は次年度のアドバイザーに就任しています。こうして継続的に開催を支える体制を作りました。

会員である私たち自身が行きたいと思い、行って良かったと思える、明日の研究へのエネルギーの得られる場が、ますます多様な地に広がっていくことを願っています。大会にお力添えくださいました全ての皆様に、深く感謝申し上げます。

報告者:大会準備委員長・田中共子(岡山大学)

▶ 第14回年次大会特集

特別講演〈一般公開〉

「救える命があればどこまでも:多文化世界と繋がる支援活動の最前線」

講師:菅原 茂 氏 (認定特定非営利活動法人アムダ(AMDA)代表)

今回の特別講演では、AMDAグループ代表者・菅原茂氏を講師としてお迎えした。多文化世界と繋がる支援活動を行う、AMDAの理念や最前線の活動についてお話頂いた。

まず、AMDAの活動や成り立ちについて説明された。AMDAは岡山市に本部を置くNPO法人である。その活動は日本国内だけにとどまらない。世界30ヶ国に支部を持ち、これまで多くの国々において支援プロジェクトを行っている。菅原氏は、文化はすなわち価値判断であると述べた。AMDAは様々な活動を“文化が異なる”つまり“価値判断の異なる”海外でも積極的に行っている。

次に海外へ支部を広げるために、大切にしていることを話された。そのためには多文化社会に根差した、つながりの作り方が重要であるという。開かれた相互扶助で信頼を形成し、現地の価値判断に合った方法で関係を構築する。的確に必要な支援を行う為に欠かせないものだと話された。例として、インドネシアのアチェで災害が発生した時のことを挙げられた。当時現地の微妙な情勢の下、支援チームのアチェ入り

が血縁共同体社会であると聞き、その価値判断を取り入れた支援の提案を行うことで、AMDAのアチェ入りは受け入れられたという。

そして次に相互扶助について語られた。支援を受ける側にもプライドがあり、人の役に立ちたいという思いが存在する。支援する側が、その気持ちを理解・尊重することによって、援助はより円滑に受け入れられる。また、支援を受ける者、行う者の関係を対等なパートナーシップとして位置付けることで、苦労を共にするという姿勢を示す。そして、支援の内容を現地の人々自身に決定してもらい、押しつけ型の援助ではなく相手に尊敬と信頼を持っていることを態度で表す。どのような状況であっても逃げないと示すことで、絆がより深まるのだと感じた。

「考えると迷う。」と菅原氏は言った。AMDAは、どんなに人が居ても、どこで起きても、困った人がいたら絶対に助けるという。AMDAなら助けてくれるという信頼の為にもその姿勢を貫く、ときっぱり語った姿がとても印象に残った。

報告者:竹下千尋(岡山大学)

プレカンファレンス 「多文化社会における国際協力の仕事論」

講師: 白幡 利雄氏 (特定非営利活動法人AMDA社会開発機構(AMDAMINDS)職員)

プレカンファレンスは、前半が講義、後半がワークショップという2つのパートに分けられた。講義は、白幡氏のNGOとの出会いから今日に至るまでの話を皮切りに始まった。海外駐在の体験談では、支援したトイレや井戸が壊れたまま放置されていたことを例に挙げ、持続可能な支援を施すことの難しさと重要性が語られた。

次に、国際協力・開発の歴史を振り返り、現在主流となっている「参加型開発」とは何かについて概観された。参加型開発は、地域の問題や解決方法を最も熟知しているのは、その地域住民であるという考えのもとで展開される。一人一人の住民の声を聞き、現状を把握し、彼らを作業に参加させることで、一人一人をエンパワーメントし、最終的には自分たちで問題を解決できるようにすることを目的としている。この参加型開発を実践する上で使われるのが、PRA (Participatory Rural Appraisal) や PLA (Participatory Learning and Action)と呼ばれる手法である。これらの手法には、話し合いや、村についての情報の把握、問題の発見、着手すべき問題のランク付け等、用途に沿って様々なツールがある。

後半のワークショップでは、その代表的な2つのツールを実践した。まず、地域の状況や問題を地図に表すSocial/Resource Mapという方法を行った。4、

5名でグループを作り、リーダーを決めた。そして、メンバーの中から一人を選び、その者が住んでいる地域を題材に地図を描いた。更に、その地域における問題を、そこに住むメンバーに尋ねながら文字や絵で書き加えていった。作業後、作成した地図を全体で見せ合った。それぞれの地図からは、都市部の環境問題や、地方都市の高齢化や害獣被害への指摘が読み取れた。

次に、地図上に示した複数の問題をどの順番で解決に着手するのかを決めるために、Pair-wise Rankingという方法を実践した。まず、クロス集計表を作り、問題を対にして比較し、どちらを先に解決すべきかを判断していった。

PLAを行う上では、権利を持つ者と義務を果たさなければならない者の両者の状況を考えることと、この村の本当の課題は何か、今何を尋ねているのかを常に意識することが必要であるという。この点を見失わないための工夫の一つとして、対話型ファシリテーションという手法が今注目されている。これは、「なぜ？」を使わずに事実のみを尋ねていく手法である。最後に、この手法について演習形式で学び、カンファレンスが終えられた。

報告者: 中野祥子(岡山大学)



ラウンドテーブル(ミニ発表会)

世界各地で異文化接触が日常化する今日、国境を越えた研究者の交流も盛んになっています。今回の大会では、日本を拠点とする研究者の声をこれまで以上に世界に届けるために、若手研究者が英語で研究発表を行い、楽しく英語で交流をする機会を設けることにしました。学会ホームページでの呼びかけに応じて、留学生2名を含む4件の応募がありました。発表者は8～10分程度の研究発表をした後、フロアと質疑応答(必要に応じて企画者から研究に関するコメント)、最後に総括とディスカッションの時間を設けるというのが企画内容でした。特に本年度は、企画者の一人、岡山大学のミラ・シミッチ先生が、発表の指導に大きく関与してくださいました。発表予定者はシミッチ先生と何度もやり取りを行い、読み原稿の作成、原稿に基づきパワーポイント・スライドの作成、アブストラクトの作成と着実に準備を進めて行きました。当日の発表ぎりぎりまで、スライドの微調整に取り組むほどの熱心さで取り組んでいただきました。参加者とそのタイトルは以下のとおりです。

1. **Shunsuke Nukuzuma**, *Qualitative survey of 'Fushugaku' in Community-Based Japanese Language Class Centers.*
2. **Irena Miskiniene**, *English Language Teaching in Lithuania and Japan: Prospective*

Collaboration on Cultural Exchange with the Purpose of Improving English Language Communicative Skills.

3. **Zhang Xiaohong**, *Analysis of the Image of Women in China's Talk Show: Using the Show 'Her Village' as a Case study.*
4. **Hisayo Mihara**, *Factors affecting international students' attitudes and motivation toward Japanese as L3.*

このように、話題は多岐に渡りいずれも刺激的な内容でした。留学生2名の発表からは、その地理的条件とは切り離せないリトアニアの英語教育事情、中国のメディアに描かれる女性像などが紹介され、一方日本人の大学院生2名の発表は、法律の隙間で取り残された在日外国人児童の不就学の実情に迫るもの、在日留学生の第3言語としての日本語への態度と学習動機に関するものでした。発表者の資質と努力にミラ先生の指導が加わり、スライド作成など技術面の水準もかなり高いものとなりました。このような力作だけにセッションへの参加者がやや少なかったのは残念ですが、いずれの発表にもフロアの参加者からの質問や議論が活発に行われ、楽しく有意義な議論の場をもつことができました。

報告者: 八島智子(関西大学)



学際シンポジウム 「地域をベースに多文化共生を考える」

今大会のシンポジウムは「地域をベースに多文化共生を考える」をテーマとし、専門分野・研究地域が異なる3名のシンポジストと指定討論者を迎え、参加者と共に様々な多文化共生の在り方や多文化関係学について考える機会とすることを目指して企画された。

第一シンポジストの高橋氏はフィンランドについて、まず言語と教育政策を軸に歴史的経緯を踏まえ、その変遷を概観された。現在の公用語はフィンランド語とスウェーデン語であり、準公用語はサミ語と共に手話が含まれていることを指摘された上で、13世紀～1809年までのスウェーデン時代、その後約100年間のロシア自治領としての時代を経て、フィンランド語は1863年にスウェーデン語と対等性を獲得し、フィンランド語での学校教育は19世紀末から開始、公用語に位置づけられたのは1902年であったこと。また学校教育においては生徒の学習権が重視され、各母語での補習授業も行われている。さらに現在ヨーロッパで議論されている難民の受け入れについては、フィンランドにとっても今後の課題であり、「文化的寛容性」が真に問われる時代だと指摘された。

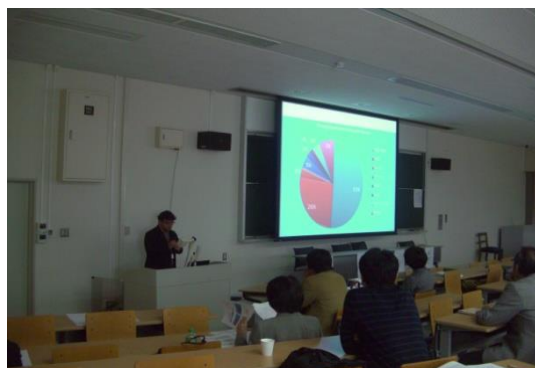
続いてグアテマラ出身のアルファロ氏は、関西地域におけるラテンアメリカ系児童生徒の教育現状を、保護者へのインタビューを通して語られた。学業成績、出席状況、宿題、学校側の支援、教員と保護者との関係等様々な項目について調査を行った中で最大の課題は、言語の壁、いじめなどを含む人間関係、

適応の問題であった。同時に保護者の間で日本の学校に対する意見は異なり、さらに対応の仕方が、学校の組織としてというより、教員を初めとする個人の対応に寄っているということも指摘された。

高谷氏は、岡山倉敷フィリピンサークル(OKPC)のメンバーによる、AMDAのフィリピンにおける現地救援活動コーディネーターとしての活動を、トランスナショナルな市民社会への参加としてとらえ、社会学者としての分析と見解を示された。現地におけるOKPCメンバーへの感謝の声と共に、二つの社会にまたがる存在としての移住者の役割、社会関係資本の活用、さらに移住女性に対する肯定的な評価と地域社会における地位の向上等、越境的な社会活動とホスト社会への編入の肯定的な結びつきを強調された。

3名のシンポジストの貴重な見解を受けて、指定討論者の松田陽子氏は、多文化関係学を見直す機会を提供された。理論と実践が伴った学際的なアプローチであると共に、マクロ/ミクロ/メゾ、点/線/面としての捉え方、またパワーの相互関係・相互変容等どのような側面から考えるのか、アプローチも人権的、福祉的、社会参画的等、様々な捉えがあり、一見ローカルなミクロな課題を調査しながら、大きな視点で分析し直しマクロなレベルで移民政策や社会政策のレベルで再度考えるといった視点も提供された。大会最後のプログラムであったにも拘わらず、60名近くの参加者があったことから関心の高さが伺われた。

報告者: 大谷みどり(島根大学)



テーマティックポスターセッション 「留学生とまちづくりの未来」

今回の年次大会において、本学会初めての試みとして、「留学生とまちづくりの未来」にテーマをしばったポスターセッションを企画し、実施した。文部科学省の「留学生交流拠点整備事業」に見られる事例のみならず、実際、留学生は学校や企業、自治体等にとって単に支援し、交流する存在というだけではなく、地域の経済活性化や観光振興を担う人材として期待され、自ら地域における交流実践、ボランティア活動、教育支援等に主体的に取り組む例も増えてきている。報告者自身も、留学生も含め学生とともに社会連携事業を行っているが、地域との連携には第一に、関係性づくりに困難さが集約されるところがあり、他地域ではどのように連携体制をつくっていったのかということにまず関心があった。また、本学会をはじめ、他学会でも大学における留学生に対する支援や教育といった取り組みは数多く報告されているが、留学生の地域での活動を単なるボランティアではなく、社会との関わりを学習していくプログラムとして教育体系の中にどう組み込んでいったら良いのか、といった点についてもオープンに対話したいと考えた。

今回のポスターセッションの報告者は5組で、そのうち岡山大学、佐賀大学、立命館アジア太平洋大学の報告は、大学と地域社会との交流・実践に関わるもの、あとの2組は留学生個人の内面に焦点を当てた報告であった。地域社会との交流・実践に関わる報告からは留学生が地域に関わることで、地域の特性や良いところが再発見されるメリットがあり、地域のお年寄りも元気になるという報告もあり、留学生が地域社会に溶け込んでいくことのプラス面は大きいこと

がうかがえた。一方、留学生自身にとっても地域には教室内では学習できないコンテンツが多くあることがメリットになっているものの、その地域に出向いていくための時間や経費という点に関しては負担になる面もあり、考慮すべき要因であることが指摘された。また、地域での受入の窓口になってくれる人物が重要であること、地域の人々にもメリットがある交流になるような工夫が必要であること、単発ではなく継続的な交流になっていくことが双方のメリットにつながる可能性が示唆された。

留学生個人の内面に焦点を当てた報告からは、留学生の属性や専門性の違いによってもボランティア活動をはじめとする社会との関わり方の意味づけが異なってくる可能性があること、留学生が直面するであろう対人関係、ホスト社会との関係性維持や発展に関わる認知面の困難点やプロセスについての理解は、留学生のチューター指導などにも活用できるといった意見が交わされた。

最後に、参加者各位のおかげで和やかな雰囲気の中でセッションを進めることができたことをまず感謝申し上げたい。ただし、当初、質疑応答も含めて各10分の報告を予定していたが、結果的には15分程度になってしまい、全体のディスカッションの時間が予定より少なめになってしまったこと、全体の時間が90分を超えていたため、初めから椅子に座った形式でセッションを行ったほうが良かった等は実施面での反省点である。

報告者:松永典子(九州大学)



特定課題研究

岡山大会では、特定課題研究として「外国籍の子どもの不就学問題」をテーマに、奴久妻駿介会員、田中真奈美会員、馬場智子会員から示唆に富む発表がなされた。そもそも「不就学」は、外国籍の子どもは日本の学校への就学義務がないことから生じる問題である。これに対し奴久妻会員は、外国籍の子どもの教育を受ける権利という視点から、これまで別個に論じられてきた不就学と外国人学校の議論を理論面から検討した。次に田中会員が国内の外国人学校(民族学校)の、馬場会員が海外(タイ)の外国人学校の事例について検討を加えた。今回我々は、湊邦生理事とともに会議を重ねてきたが、『不就学』の

意味づけを問い直し、『日本の教育』そのものを相対化する(奴久妻会員)」という我々の目的をひとまず形にすることができ、世話役の私としても胸をなでおろしている。本特定課題研究は、2013年の年次大会後、学会事務局から出された共同研究者募集の呼びかけに端を発したもので、今日に至るまでには課題も多かったが、専門分野の異なるメンバーとの議論は、学際性を旨とする本学会のメリットを十二分に享受できる貴重な機会となった。この場を借りて感謝を申し上げたい。

報告者: 吉田直子(東京大学大学院)

石井奨励賞審査結果

若手研究者を対象とする石井奨励賞では、多文化関係学への貢献度を重んじた審査基準により受賞者を選出致しました。今回選ばれたお二方のご研究は、張曉蘭さんの「中国人結婚移住女性の自律学習—地域日本語教室から地域社会への参加プロセスに着目して—」と、近藤大祐さんの「浜松におけるブラジル人移住第2世代の発信活動—ライフストーリーの分析から—」です。両研究発表とも、多文化関係学に新たな展望を与えるものとして、高い評価を得ました。

張さんのご研究では、中国人結婚移住女性のインタビューにより、彼女たちが地域社会に参加するようになった背景には、日本語教室での学習に加えて、自律的な日本語の学習があるということが分かりました。特に、教室での学習を終えた後にも、自律的に学習を続けていたことに焦点が当てられました。この結果は、地域日本語教室の在り方に対して、大きな問題提起をしたと考えられます。彼女たちが、日本語学習を独自に継続するモチベーションを持っているのであれば、より効果的な学習方法と教材の提供をすることが望ましいと言えます。このことは、

彼女たちのホスト社会への参加をより援助するためにも、言語教育が欠かせない要素です。教授法や授業形態に加えて、自律学習支援も積極的に検討すべきであるという視点を、新たな展望と評価しました。

近藤さんのご研究は、インタビューを用いながら参加者のライフストーリーに注目し、段階性の枠組みを使って分析をされました。その結果、日本の教育を受けて、大学にまで進学することができたブラジル人の二世は、「情報」、「時間」、「アイデンティティ」を有効に活用していることが分かりました。その成功の背景が明確に示され、それらは学校に対するより確かな情報を得る事、具体的な進路を考えた上での将来設計の構築、そして前向きに自分の文化的背景を捉えることであるとの発見がなされました。新たな展望として評価できる点は、多文化社会が既に実現しているという視点から、この課題をさらに深く追求されたことです。現状を的確に把握し、さらに今後起こりうる問題を指摘しながら論を展開されています。

お二人の今後のご研究におかれまして、さらなる分析とより厚みのある論考を期待しています。

石井奨励賞審査委員長 John E. Ingulsrud

第15回年次大会(第1報)

■日時:2016年10月1日(土)・2日(日)

*プレカンファレンス:9月30日(金)

■場所:

佐賀大学本庄キャンパス 〒840-8502 佐賀県佐賀市本庄町1番地
教養1号館

佐賀大学本庄キャンパスへのアクセス(<http://www.saga-u.ac.jp/access/index.html>)

キャンパスマップ(<http://www.saga-u.ac.jp/gaiyo1/campusmap/index.html>)

■テーマ:「多様性を育む社会:繋がりと協働の未来に向けて」

「多様性」という言葉が世の中で頻繁に使われるようになった一方で、未だ、それを許容しない風潮が社会に存在することも事実です。本大会が個人としての多様性と社会としての多様性の両方を認め合い、協力して豊かな創造を生むことのできる寛容な社会の育成のヒントになれば幸いです。

■主催:多文化関係学会 佐賀大学

2016年度の第15回年次大会は、有田焼創業400年を迎える佐賀で開催します。佐賀は自然豊かな歴史的遺産にも恵まれた土地柄で、空路、陸路ともに交通事情も便利です。自然と文化が響きあう絶好の地で活発な議論ができる大会となるよう、多様な内容のプログラムを揃えてお待ちしております。

第15回大会準備委員会

1. プレカンファレンス:「多文化関係学研究者のための混合研究法入門セミナー」

多文化関係学研究者を対象とした混合研究法入門セミナーです。

講師:抱井尚子氏(青山学院大学国際政治経済学部国際コミュニケーション学科・教授)

2. 特別講演:「共に生きる未来へ:福岡での移住女性支援から考える」

講師:松崎百合子氏(NPO法人女性エンパワーメントセンター福岡 理事)

いま私たちの社会は家事介護分野に海外移住労働者を受け入れようとしています。女性の活躍を旗印に進められているこの流れの先にはどのような未来が待ち受けているのでしょうか。人身売買、ドメスティックバイオレンスなど、福岡における移住女性の相談やシェルター支援、日本語教室開催など、これまでの女性エンパワーメントセンター福岡の長年に渡る実践活動に耳を傾けながら、共に生きる未来について考えます。

3. 学際シンポジウム:「温故知新一交流史から見た東アジア世界」

九州は太古より大陸文化の窓口として歴史的、文化的に重要な役割を果たしてきました。シンポジウムでは、東アジアと日本の外交を含めた交流史を専門とする3名の研究者をお招きし、各々のテーマについてお話いただきます。

シンポジスト:宮武正登氏(佐賀大学全学教育機構教授・佐賀大学地域歴史文化研究センター長)、伊藤幸司氏(九州大学大学院比較社会文化研究院准教授)、渋谷百代氏(埼玉大学人文社会科学部研究科准教授)

4. ラウンドテーブルトーク:「大学院生およびポストドクター対象キャリア・セッション」

本セッションでは、本学会所属の若手教員数名が、どのように就職活動を展開し、ポジションを得るに至ったのかという過程について経験を共有します。その後、大学院生およびポストドクターの参加者からの質問に答えるQ&Aセッションを実施します。こうしたキャリア相談を、ラウンドテーブルトークという話しやすい形式で実施する本学会初の試みです。大学院生およびポストドクターの方々の参加をお待ちしています。

5. ラウンドテーブルディスカッション:「プレゼン力を磨く! -英語で語る私の研究(2)」

2015年度大会に引き続き、大学院生や若手研究者を対象とした英語によるショートスピーチセッションを開催します。参加者とのディスカッションを通じて、自身の研究を深めてもらいたいと思います。

6. 懇親会:佐賀ならではの食材をご用意してお待ちしております。

今後の予定:学会HPに順次情報を掲載、学会員へのメールでお知らせしていきます。

- ・3月15日(火)発表募集・参加申し込み開始
- ・6月1日(水)発表申し込み締め切り、発表審査開始
- ・6月8日(水)(必要な場合)延長された申し込み締め切り
- ・6月中旬 審査結果通知
- ・7月20日(水)抄録提出締め切り、大会事前参加申し込み締め切り
- ・9月上旬 プログラム発表

***開催時期が早期なため、発表申し込み等の締め切りも例年よりも早まっておりますので、ご注意ください。**

【大会ポスター】

2015年度の年次大会で掲示しました予告ポスターを大会Webページ(<http://www.jsmr.org/meeting/jsmr2016/>)からダウンロードできます。A4サイズです。広くお知らせにお役立てください。

【大会準備委員(2015 12.1 第一次)】

中川典子(流通科学大学)、山田直子(佐賀大学)、湊邦生(高知大学)、
奥西有里(岡山理科大学)、石黒武人(順天堂大学)、金本伊津子(桃山学院大学)、
出口朋美(近畿大学)

お問い合わせ:大会事務局連絡先 jsmr2016@gmail.com

地区研究会報告

■北海道・東北地区研究会報告

日時:2015年8月1日

場所:藤女子大学

2015年8月1日「多文化関係学会・北海道東北支部研究会」が藤女子大学で開催され、長谷川典子先生(北星学園大学)と久米昭元先生(元立教大学・本学会幹事)の研究発表が行われた。長谷川典子先生の発表は、「偏見・ステレオタイプの通減に向けて:異文化コミュニケーション教育の視点から」という問題関心についてであった。情報過多の時代にあって、ステレオタイプはイメージを集約できるという意味で便利な記号である一方、受ける側の精神的ダメージは計り知れず、その殻から抜け出すのも容易ではない。多数派の物差しが「少数派の行動を実際より頻繁に起こっているように知覚しがち」であるという先生のご指摘は、あらゆる社会問題に当てはまるものと言える。“empathy”の解釈を巡る熱い議論も交わされた。少数派の声に耳を傾け、社会に架橋するのが多文化関係学の責務ではないかと再認識させられる時間であった。(担当:千葉美千子)

久米先生は『沖縄本土間パーセプションギャップの要因を探る:1969年日米首脳会談(共同声明)の分析を通して』というテーマで、「普天間基地移設問題」、「沖縄について」、「普天間基地から辺野古への移設に関する沖縄と本土のパーセプションギャップ」、「沖縄返還交」、「日米首脳会談」、「1950年から1969年佐藤・ニクソン会談」、「沖縄問題懇談会」などについて、前半は資料を基に問題提起から研究発表をはじめ、後半はコメンテーターと参加者との間で、現在沖縄が抱える問題について歴史的背景から環太平洋を取り巻く国際政治環境の変化などについて議論を行った。

報告者:御手洗 昭治(札幌大学)

■関東地区研究会報告

日時:2015年5月23日 13:15~15:30

場所:青山学院大学

話題提供者:武田 礼子 先生(国際基督教大学大学院)

発表テーマ:「会話分析から異文化間コミュニケーションを考える」

今回の研究会は、武田礼子先生が、ご自身の研究をもとに、異文化コミュニケーション研究における会話分析の手法について概説され、参加者が実際にデータ分析を体験しながら学べるワークショップもあり、初学者にも会話分析が身近に感じられるセッションでした。

最初に、さまざまな研究方法の中での会話分析の位置づけ、視点、理論的な枠組みについて概説されました。次に、社会科学の視点から見て重要である、信頼性、妥当性、数値化の問題について説明されました。続いて、会話分析の手順について解説がなされました。書き起こしの問題や分析に用いる記号といった初歩的な問題から、分析の際に重要な視点まで、先生ご自身の豊富な体験を交えながら、講義が進められていきました。

後半は、英語教育における会話分析の事例が紹介されました。一つ目は、英語教師がポジティブ・フィードバックとして発話する“Very good”の使い方が、時に学習者の発言の機会を奪う可能性があるという事例について紹介され、その対策案が提示されました。二つ目の事例は、帰国生を含む学習者同士のグループ・ディスカッションを扱い、トピック展開や沈黙の長さについての分析が紹介されました。





休憩をはさみ、ワークショップが実施され、「徹子の部屋」における黒柳徹子氏とローラ氏の会話のトランスクリプトを用いた分析演習が行われました。黒柳氏のフォーリナー・トークとローラ氏のベイベー・トークが行き交う会話において、順番交代のタイミングとオーバーラップについて、実際に記号をつけながら分析を行いました。質疑応答では、先生の英語教師としての豊富なご経験にもとづき、英語学習において、談話のパ

ターンに習熟させることの重要性と、日本から米国に留学する学生への実践的な示唆も提示されました。

今回のセミナーを通じて、筆者のような初学者でも、記号をつけながらデータと何度も向き合うことで、様々な発見や解釈が生まれてくることに楽しさを感じる事ができ、会話分析が身近に感じられました。参加者全員が、今後の異文化コミュニケーション研究における会話分析の有益性とその奥深さと可能性に魅了されたセッションでした。

報告者:原 和也 (明海大学外国語学部英米語学科)

■ 関西・中部地区研究会報告

日時:2015年7月25日 15:00~17:00

場所:大学利用施設UNITY(ユニティ) セミナー室2

話題提供者:上田義朗 (流通科学大学教授、日本ベトナム経済交流センター副理事長)

テーマ:「今秋公開予定:日本ベトナム初の合作映画『ベトナムの風に吹かれて』:新しい異文化交流の成果」

上田義朗氏がプロデューサーを務められた映画「ベトナムの風に吹かれて」は、1970年代日本の国際化が進みつつある中で世界に飛び出した若者の顛末記である。松坂慶子氏が演じる小松みゆき氏は、日本の国際化が進む中、ベトナム・ハノイで日本語を教える教職に就く。その後、ベトナムでの数十年の歳月を経ることにより、当然のことながら故郷・越後にいる母も歳を取り、国境を越えて老親の介護の問題に直面するようになる。まさしく個人のインターナショナル・マイグレーションの「その後」の話である。



このようなインターナショナル・ケアと言われる老親の介護の問題に対峙している海外在住の日本人は少なくない。1年に何度も日本と行き来し単身帰国して介護をすることで、息子・娘としての役割をなんとか果たそうとしている。中には少数ではあるが、小松氏のように海外に老親を連れてきたという人もいる。映画に描かれていたとおりであるが、最初は海外旅行気分がいいのであるが、病気や怪我で老いが進むと、結局は自分の力で日本にいるのと同じように在宅介護をする環境を整えなければならなくなったという皮肉なストーリーも聞く。

老いは過酷である。その中でも認知症は、いつどのような症状がでてくるか予測不能なパンドラの箱のようなものである。小松氏の母はベトナム人との交流を楽しめることができる軽度の認知症で、老いの入り口に差し掛かったというところで2時間の映画は終わった。活気のあるハノイの町の風景とベトナム人との交流が老いの問題の深刻さを忘れさせてくれていたが、筆者は、小松氏の母の「その後」と、そして、小松氏はベトナムで1人どのように老いていかれるのであろうか、小松氏自身の「その後」が気になった。

最後になるが、関西地区研究会では、さまざまな日本とベトナムとの合作映画作製に関わる苦労話をお聞かせいただいた。日本語版とベトナム版の2編をマネジメントされ成功に導かれた上田氏は、ベトナムに吹く熱い風のようにもあつた。

報告者:金本伊津子(桃山学院大学)

2015年度多文化関係学会 理事会議事録 抄録

■第1回理事会 議事録

日時:2015年5月23日(土)12:00-13:15

場所:青山学院大学(青山キャンパス)15号館ガウチャーメモリアルホール15506

出席:8名(敬称略、以下同)石黒、田中、原、湊、山田、山本、守崎、渋谷

委任状:5名 奥西、笠原、出口、中川、長谷川

[報告事項]

1. 事務局

会員数349名、うち院生100名。3名ほどが学生会員から正会員に移行。

2. 各委員会報告

[NL委員会] 紙媒体をPDF化するだけなら安くつくが、デザイン等を業者に依頼すれば初期費用が掛かる。費用については今年度中に支払うが来年度分として予算化し対応する。

[関東地区委員会] 本日第1回研究会。NLに掲載がなかったにもかかわらず、22-3名の参加者を受け付けた。

[九州地区委員会] 地区会員が20名弱ぐらい、半数が院生。研究会をどう開催するかが課題。

[中国・四国地区委員会] 今月16日に研究会開催、12名参加。テーマ「マレーシアにおけるグローバル人材戦略」

[学会誌編集委員会] 査読者を決定して依頼中。

[学術委員会] 委員を引き続き募集。活動内容についても検討中。特定の地区・学術分野にこだわらずに委員を募集し、地区・分野の枠を超えた学術活動の促進につなげたい。

[関西・中部地区委員会] 7月25日に研究会予定。NLでもアナウンス。

3. 年次大会の準備状況

新規企画としてラウンド・テーブルを開催。

年次大会開催のための業務については、会場予約が最初の仕事。事務局は予算作成、広報はポスター作製やメール告知、プログラム担当者がプログラム作製、調整役が1人いると良い。他の担当者と兼任でも可能。企画担当者は会員から自由に募集可能。

中川理事、湊理事が来年度の担当、他にも人員が必要。会場校も募集する必要あり。

4. その他

前回(前年度)の理事会で“SIG”1つの立ち上げを承認したが、今後のSIGのあり方、既存の特定課題研究との関係等については継続審議。

[協議事項]

1. 2015年度予算案

[NLの電子発行について]

会員への届け方および紙面デザインについて、協議の結果、カラー化したデザインを外注し(初期費用は10万円程度)、会員メールにURLを張る方法で届けるということに決まった。デザイン業者に見積もりを依頼することとする。

[学会誌について]

学会誌が高額化、予算を圧迫している状況を鑑み、2016年度以降の電子化について、今年度の理事会で方向性を決めていくこととする。

2. 2016年度年次大会開催場所について

2016年度大会について、佐賀大学で開催する方向で、山田理事が会場確保の可否を確認することになった。

3. ヘイトスピーチ声明文について

会員から本学会として抗議声明文『「人権を侵害する反社会的行為」であるヘイトスピーチに抗議します』を出したいという提案があった件に関して、協議した。本学会として会員の総意として出すのであれば、理事会だけで決めるのではなく11月の総会で決めるべきとして、事務局より提案者に通知することとした。文案に2014年年次大会についての記述がある以上、総会で決まれば早めに公表する方がよいことを確認した。

4. その他

年次大会における特定課題研究のセッションについては、進行方法を同グループに一任する。ただし、グループ側は大会委員と連絡を密に取ることとする。

以上

■第2回理事会 議事録

日時:2015年7月25日(土)12:00-14:20

場所:大学利用施設UNITY(ユニティ)セミナー室2

出席:8名(敬称略、以下同)石黒、奥西、田中、出口、中川、湊、守崎、渋谷

委任状:5名 笠原、長谷川、原、山田、山本

[報告事項]

1. 事務局

会員数 (2015年7月21日現在) 総数 363名

(内訳) 一般会員 258名 (年度末退会予定者 1名、退会希望者 2名)

学生会員 102名 (退会希望者 1名)

シニヤ会員 2名

賛助会員 1名

海外会員 12名(一般会員 9名、学生会員 3名)※内数

CiNii廃止に伴い、J-Stageへ移行。説明会事務局長が出席予定。

2. 各委員会報告

[関西地区委員会] 7月25日に研究会を開催。

[ニューズレター委員会] 年次大会頃に2月発行分の原稿を募集する。

NLの電子化に向けてデザインを外注する準備・検討を始める。デザインに関しては後ほど理事会内で検討する。

※その他の委員会から報告・審議事項等がある場合は、適宜理事メールによって行うこととする。

3. 年次大会の準備状況について

7月24日に発表申し込みを締め切り。応募数は口頭およびポスター発表37件(前年度19件)、加えてラウンドテーブルの若手向けミニ発表5件 計42件。

*8月7日までに査読し、結果を通知する予定。

学生会員向けに企画した枠(5枠)は希望者が多かった。ニーズがあったと考えられる。

[協議事項]

1. 石井賞選考委員について

選考委員について、条件の合う人に広く声がかかる可能性があることが学術委員長から説明され、了解された。

2. 「特別研究員」会員ステータスと学会費割引について

無給研究員等の会員に対する会費割引制度が設計できるか否かの提議があり、審議の結果、例外は作らず、現行通り「正会員」として扱うことが確認された。

3. 各委員会委員の任命について

会長より、各委員会の委員についても理事同様に任期制にしたいとの提案があり、了承された。

任期は理事と同様、1期2年、2期まで(目安)、を基本設計とし、任命に際して任命状を出す。今年度から適用する。

○委員の任命の手続き:委員長が指名し、理事会に承認を受ける(ML利用可)。なお、委員長のほかに理事会も委員候補者を推薦できる。

4. 特定課題研究およびSIGの現状および課題について

資料に基づいて特定課題研究に関する一連の審議を行い、以下の通り確認した。

(1)名称は、「特定課題研究」に統一する。

(2)「特定課題研究」=(学会として)焦点を当てる特定のテーマについて、異なる分野を専門に持つ人々が集い研究を進める、緩やかな研究連携の場、と定義する。

(3)テーマは公募した上で、学術委員会が「特定課題研究」としての基準に照らして検討し、理事会で承認を受ける。その後、学術委員会が主体となりメンバー募集を呼びかける。(※「特定課題研究」の基準は、学術委員会がこれから整備することとする)

(4)現在は特定課題研究またはSIGとして二つのグループが理事会の承認を得ている。

*新座大会時に開催した企画(多文化関係学とは、を考えるもの)から派生した。理事会での了承を得て事務局を通じて参加者を募集し、現在は4名が中心となり、活動中。今年度年次大会にもパネル企画を開催予定。

ただし、2013-2014年度の理事会での「承認」はガイドライン等が不明確なままであったため、2015-2016年度理事会にて「特定課題研究」に関わるガイドラインが新しく設定されるに伴い、「多文化関係学会」の名前を用いて活動する場合にはガイドラインに基づいているかどうか学術委員会および理事会が判断し、再度承認することとなった。

承認ガイドラインおよび理事会承認の手続きは、ガイドライン素案をもとに改めて審議する。

(5)「特定課題研究」活動補助金については、他の予算項目を振り分けることで捻出する。しかし、財源は限られているので、補助規模(1年2件まで、3年上限、など)の範囲を決める必要がある。

(6)理事会の審査を経て活動補助金を受けた「特定課題研究」は、研究報告書、決算報告書の提出、学会誌への成果投稿を求める。学会誌への投稿の場合は、「特定課題研究」の成果であることを明記する。

(7)「特定課題研究」として正式に採用されない場合でも、年次大会においてパネルを企画し応募する等の機会は利用可能とする。

5. 2016年度の年次大会準備について

執行部より、来年度年次大会準備担当者(コーディネーター)の人選について各理事へ推薦依頼があった。なお、業務負担過重の場合は、補助者アルバイト等を利用して軽減を図る工夫が必要との提案があった。

6. その他

2014年度理事会からの申し送りにあった会員間の紛争調停の仕組み設定については、学会の想定するリスク/クライシスに含まれるとし、今後、他のリスクへの対応方法とあわせてマネジメントのあり方について引き続き検討していくことを確認した。

以上

■第3回理事会 議事録

日時:2015年11月15日(日)13:00-15:00

場所:岡山大学 文法経講義棟1階15番教室

出席:9名(敬称略、以下同)石黒、奥西、田中、出口、中川、原、湊、守崎、渋谷

委任状:4名 笠原、長谷川、山田、山本

[報告事項]

1. 事務局

会員数総数 368名

(内訳) 一般会員 262名 学生会員 103名 シニア会員 2名 賛助会員 1名 (不明)

海外会員 11名 (一般会員8名 学生会員 3名)※内数

J-Stageへの移行は、申請手続き済。許可がおりれば、学会誌論文の電子化を業者に正式発注する。

2. 各委員会報告

[関西・中部地区研究会]2016年3月12日に研究会を名古屋外語大で開催予定。ただし、登壇者については調整中。※理事会も同日開催

[学術委員会]特定課題研究の募集要項を作成、理事メールで承認済み。新委員は候補者に打診予定。

[学会誌編集委員会]学会誌の電子化について、印刷することの優位点はあるが、諸事情により電子化への要請があるなら、希望者などには印刷版を提供できる仕組み(オンデマンド印刷など)等、考えるオプションについて検討したい。→電子化のロードマップ検討を依頼。

[Web管理委員会]11月24日サーバーメンテナンスのため、一時的にHP利用不可。

学会HPのトップ画面レイアウトが原因不明で変更されてしまったが、現在はできる範囲で修正済み。

3. 年次大会(於:岡山大学)について

2日間の参加者90名、プレカンファレンス28名。特別講演61名。懇親会は事前申し込みで30名、当日申し込みがあり40名を越える参加者となる。

【石井賞】対象者8名から、1次2次審査を経て2名に決定した。

○近藤大祐氏「浜松におけるブラジル人移住第2世代の発信活動—ライフストーリーの分析から—」

○張曉蘭氏「中国人結婚移住女性の自律学習—地域日本語教室から地域社会への参加プロセスに着目して—」。

*賞状および副賞は送付、来年の年次大会に出席の場合はスピーチ依頼

4. 来年度の年次大会について

9月30日プレカンファレンス、大会10月1日、2日で実施。

協議事項

1. 特定課題研究の募集・選考について(確認)

事前にメール審議で了承された募集要項に基づく募集スケジュールを以下の通り確認した。

応募締め切り:1月末、審査:2月、理事会承認:3月、研究開始:4月。

学術委員会より、採用件数および支援規模、支援金使用ルールについての確認があり、協議の結果、1,2件の採用、各2万円程度の支援(報奨金タイプ)を目安と考えることとなった。

2. 委員会の人選について

編集委員および学術委員の補充について協議を行った。委員長から候補者に打診することとする。

3. 総会に関する規則(決議手続)について

これまで総会の規定、特に決議方法に関する規定が不整備であったことが2015年度総会で明らかになったため、この機会に整備をしたい旨、執行部より提議があり、了承された。今後の作業は、まず原案を執行部で作成、理事会のメール審議を経て、最終案を次年度臨時総会(5月)に提案する、という流れで進めることとなった。

4. 声明文『「人権を侵害する反社会的行為」であるヘイトスピーチに抗議する】の扱いについて

総会で理事会預かり事案となった標記声明文に関して、活発な議論があったが結論に至らず、以下の点に留意の上、継続審議となった。

- ・今回の声明文だけでなく、これからの同様事例に関しても視野に入れる
- ・会員からの提案にどう理事会が関わるか、理事会の役割を明示化する
- ・速やかに審議する必要があるが、手続きはいい加減にしない

5. 次回理事会の開催確認

3月12日午後12時以降に開始とすることを確認した。会場は名古屋外語大の予定。

6. その他

特別課題研究について、複数名のペーパーを一人分として応募できるようにして欲しいとの要望があった。

以上

お知らせ

地区研究会のご案内

■北海道・東北地区研究会

日時:2016年9月10日(土) 14:00～

場所:藤女子大学(北16条キャンパス)

講演と研究発表を予定。詳細未定。

■関西・中部地区研究会

日時:2016年3月12日(土) 15:00～17:00

*講演終了時間は17:00です。その後、30分ほど講演者の方々と歓談の時間をもちたいと思います。

場所:名古屋外国語大学 7号館3階(738教室)

〒470-0197愛知県日進市岩崎町竹ノ山57 代表電話:0561-74-1111

*7号館は北門から入っていただくとすぐ右手にあります。スクールバスのバス停から一番近い建物です。キャンパスマップとアクセス情報のURLを以下にお知らせします。

アクセス情報:<http://www.nufs.ac.jp/static/map/access.html>

キャンパスマップ:http://www.nufs.ac.jp/static/map/campus_map.html

*名古屋外国語大学のキャンパスは一つですが、間違っって名古屋学芸大学の方にいかれる方も多いためにお気をつけ下さい。

参加費:300円(茶菓代)

テーマ(1):『多文化共生』における継承語の存在—東海地方の事例を通して多文化共生継承語教育を考える

話題提供者:鈴木崇夫(すずきたかお)(名古屋外国語大学外国語学部非常勤講師)

発表要旨:「多文化共生」はNPOやボランティア団体のみならず、今や国や地方の行政でも用いられる一般的な理念となっている。その中で、外国につながるのある子どもの継承語はどのような存在なのか。継承語教育を言語政策、言語教育の両面から概観し、その意義と多文化共生への貢献を考える。

東海地方は愛知県のトヨタ自動車を筆頭にもものづくり産業が盛んであり、工場労働者として働く外国人住民を多く抱えるため、各地方自治体と連携する地域国際化協会などを中心とした多文化共生への取り組みは少なくない。しかしながら、大人や子どもに対する日本語教育が推し進められる一方で、子どもの継承語のケアについては明らかでない部分が多い。それゆえ、行政機関、学校教育機関、外国人コミュニティ、外国人家庭、それぞれ役割の異なる支援の実際を、事例をあげながら見ていきたい。最後に、多文化共生継承語教育の可能性と課題について議論を行いたい。

発表者略歴:名古屋外国語大学大学院国際コミュニケーション研究科博士前期課程修了

名古屋外国語大学大学院国際コミュニケーション研究科博士後期課程修了(博士:日本語学・日本語教育学)

名古屋市立豊国中学校国語科非常勤講師を経て、現在、名古屋外国語大学外国語学部非常勤講師、母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究会会員、台湾應用日語学会会員、カナダ教育学会会員

テーマ(2):「日本の公立学校におけるフィリピン語の母語・継承語教育」

話題提供者: 矢元貴美(やもときみ)(大阪大学グローバルコラボレーションセンター招聘研究員、宮城学院女子大学非常勤講師、兵庫県立学校・大阪府立学校非常勤講師)

発表要旨: 本発表では、公立中学校と高等学校で実施されているフィリピン語の母語・継承語教育の実践事例を紹介し、意義と課題を検討する。母語・継承語教育は、家庭内のコミュニケーション、アイデンティティ形成、認知能力獲得のために必要であるという研究が行われてきた。しかしながら日本の外国人児童生徒に対する教育施策では、母語教育に関する施策はなく、日本語教育に重点が置かれている。2014年度には小中学校で「特別の教育課程」による日本語指導が実施できるようになり、日本語教育が教育課程に位置づけられることとなった。一方、母語・継承語教育については、継承語の習得を援助する必要性に言及されているものの、公立学校ではほとんど実施されていない。本発表では、発表者が携わっているフィリピン語教育の具体的な実践内容を紹介し、公立学校で母語・継承語教育が行われる意義と課題を検討する。

発表者略歴: 大阪外国語大学大学院言語社会研究科博士前期課程修了

大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位取得満期退学

現在、大阪大学グローバルコラボレーションセンター招聘研究員、宮城学院女子大学非常勤講師、兵庫県立学校・大阪府立学校非常勤講師

約16年前より、兵庫県と大阪府の公立小・中・高で主にフィリピン出身の児童生徒とその保護者の支援に携わっている。また日本で暮らすフィリピンにルーツを持つ子どもたちの教育について調査研究を続けている。

【問い合わせ先】

中川典子(関西・中部地区研究会委員長、流通科学大学人間社会学部)

メール: Noriko_Nakagawa@red.umds.ac.jp 電話: 078(794)3555 (大学代表)

■ 中国・四国地区研究会

日時: 2016年6月4日(土) 14:00~16:00

場所: 岡山理科大学 A1号館10階 教育学部会議室

話題提供者: 坂本南美 (兵庫県立大学附属中学校教諭)

発表テーマ: 「カナダ人外国人指導助手(ALT)の語りから分析する日本の学校でのアイデンティティ変容」

発表要旨: 1987年以降、英語のネイティブスピーカーがALT: Assistant Language Teacher (外国人指導助手)として日本の教育現場に配置されるようになり、日本の教育現場における外国人と日本人教員の異文化間コラボレーションは日常的に行われるようになりました。

2016年度の中国・四国地区研究会では、兵庫県立大学附属中学校教諭の坂本南美先生をお招きし、ALTによる同僚の日本人教師や生徒との関わり合いが、彼/彼女らの持つアイデンティティにどのような影響をもたらすのか、アイデンティティの変容が、生徒との関わり方や英語の教授スタイルにどのような影響を与えうるのかについて、教育現場における実践者および研究者という両方の視点から情報提供をいただきます。

本発表では、カナダ人ALTのインタビュー調査に基づくナラティブの分析を通して、ALTとしてのmeaning-makingを行うプロセスとアイデンティティの変容についてご説明いただきます。日本の学校文化における社会的関係が、教師としての行動や人としての成長にどのような影響を与えていくのかを明らかにすることで、ALTとの関係性構築が日本の教育現場においてもたらす意味について知見をご提供いただきます。20年以上にもわたる公立中学校でのALTたちとのティームティーチング(=異文化間コラボレーション)に取り組む中で見えてきた多文化関係のダイナミクスについて学び、考える、貴重な機会になることと思います。

WEB 管理委員会より

■ 会員登録情報更新のお願い

ご所属・e-mailアドレスなど会員登録情報の更新をお願いいたします。会員登録情報の変更は会員各自で行えます。登録情報を更新しなければ学会からのお知らせが届きません。登録情報に変更があった場合は更新をよろしくお願い致します。また、e-mailアドレスについては、現在使用されていないアドレスの方がいらっしゃいますので、今一度ご確認ください。なお、IDやパスワードがお分かりにならない方は出口 (tdeguchi@jus.kindai.ac.jp) 宛に御連絡下さい。

■ 登録情報の更hands順

登録情報変更手順は、以下のようになっています。

1. 多文化関係学会ホームページ(URL: <http://www.js-mr.org/>)
2. 学会員専用サイト(会員番号・パスワードを入力し、ログインボタンをクリック)
3. 登録情報更新をクリック
4. 変更点を修正し、一番下の更新をクリック

(Web管理・広報委員会委員長 出口朋美)

学会誌編集委員会より

会員のみなさまのお手元には、すでに最新巻が届いていることと存じます。ご覧いただきましたでしょうか。第12巻には、論文13本・研究ノート4本、計17本のご投稿をいただきました。ありがとうございます。厳正なる審査を経て、論文6本・研究ノート1本、計7本の玉稿が掲載される運びとなりました。ご投稿いただきました会員のみなさま、そして査読にあられた会員のみなさまには、この場を借り、心より御礼申し上げます。また、第12巻では、6名の非会員の方々にも査読にご協力をいただきました。会員のみなさまにもお知らせしておきます。詳細は学会誌巻末の査読委員一覧をご覧ください。

現在、次巻の発刊に向け、原稿の受け付けを開始しております。第13巻の投稿締切日は**2016年4月30日(土)**です。これまでの「執筆要領」「投稿規定」に若干の加筆修正が施されておりますので、ご投稿に際しましては、必ずご一読いただきますよう、お願い申し上げます。「執筆要領」「投稿規定」の最新版は第12巻の巻末に掲載されております。また、学会ウェブサイトには、3月末までに最新版をアップロードする予定でおります。

会員のみなさまからの奮ってのご投稿、お待ちしております。

(学会誌編集委員会委員長 笠原正秀)

事務局より

2015年11月13日～15日に岡山大学で開催された年次大会は多くの興味深い研究発表が行われ、地元の魅力も組み込まれた素晴らしい大会となりました。2016年に佐賀大学で開催される年次大会にもぜひご参加ください。以下、事務局からのお知らせです。

■『多文化関係学』第12巻の発送について

今年度会費が未納の方には発送されておきませんので、ご注意ください。なお、後日会費を入金された方は、学会事務局(admin@js-mr.org)までご連絡をお願いいたします。入金を確認後、学会誌を送らせて頂きます。

■会費納入状況に関するお問い合わせおよび会員情報の更新について

お問い合わせは、会費に関する業務を委託しております学協会サポートセンター(scsc@gakkyokai.jp)までお願い致します。その際、メールの件名は「多文化関係学会」とし、ご自分の氏名、ID番号、ご用件をお書きください。また、住所・所属などに変更がございましたら、大変お手数ですが、この学会員専用サイトにログインし、ご自分で情報を更新していただくとともに、学協会サポートセンターにもご連絡ください(scsc@gakkyokai.jp)。

なお、会費納入の際、払込料金(手数料)の支払いにつきましては、会員の皆様の方でご負担お願いいたします。

■学会ホームページ「学会員専用サイト」の会員番号とパスワードについて

学会ホームページ(HP)<http://www.js-mr.org/>では、登録情報の更新などを行える「学会員専用サイト」があります。情報の確認及び更新をお願い申し上げます。学会員専用サイトへのログインには、会員番号とパスワードが必要です。お忘れになった方は、事務局(admin@js-mr.org)までお問い合わせください。

■学会誌『多文化関係学』バックナンバーの販売について

学会誌の販売は、株式会社インターブックスに委託いたしております。学会誌バックナンバーのご購入をお考えの会員の方々は、恐れ入りますが、今後は学会事務局ではなくインターブックスにお問い合わせください

ホームページ:<http://www.interbooks.co.jp/>

メールアドレス: info_ml@interbooks.co.jp

電話番号:03(5212)4652 ファクス番号:03(5212)4655

なお、学会誌『多文化関係学』の論文は、論文検索サイトCiNii(2017年3月に終了→J-STAGEへ移行の手続き中)において順次掲載されております。

新入会員紹介 (敬称略、入会順)

会員資格	氏名	所属	研究分野 / 業務内容
一般	菊地 千秋美		日韓大学生の国際指向性に関する研究
学生	鉄川 大健	岡山大学大学院	異文化間心理学および臨床心理学
学生	佐藤 広夢	青山学院大学大学院	社会心理学。統計学
一般	野田 有紀	関東学院大学	国際社会福祉、多文化ソーシャルワーク
一般	江藤 由香里	山陽学園大学	エスニック・スタディーズ、マイノリティー研究、異文化交流史
学生	蔵本真 紀子	青山学院大学大学院	異文化間夫婦 国際児の発達
一般	八幡 耕一	龍谷大学	メディア論、ジャーナリズム論、情報文化論
学生	近藤 大祐	静岡文化芸術大学大学院	多文化共生、文化政策と社会的包摂
学生	張 暁蘭	九州大学大学院	日本語教育
一般	岩淵 泰	岡山大学	政治学(市民参加のまちづくり)
一般	杉森 建太郎	駒澤大学	TESOL
一般	佐藤 良子	愛知大学	異文化コミュニケーション 異文化適応/グローバル人材育成(さくら21プロジェクト)
学生	田中 稜	大阪大学大学院	文化社会学、カルチュラル・スタディーズ、多文化共生論、未来共生学
一般	水松 巳奈	東北大学	国際教育、高等教育
一般	内藤 伊都子	東京福祉大学	異文化コミュニケーション、留学生教育
一般	板橋 民子	立命館アジア太平洋大学	日本語教育
学生	中野 遼子	大阪大学大学院	留学生のネットワーク研究
学生	関本 春菜	関西大学大学院	海外ボランティアに関する研究
一般	大塚 ゆかり	山梨県立大学	社会福祉学、精神保健福祉学、住民との相互支援活動
一般	塚本 鋭司	愛知大学	教育社会学、教育哲学、質的調査法、英語教育
一般	村山 仁志	佐賀県国際・観光部	多文化共生、国際交流
学生	柿原 豪	成城大学大学院	理論社会学、多文化教育
一般	関 昭典	東京経済大学	英語教育、多文化間教育交流

(2015年5月1日から2015年10月31日に入会された方)

NL 委員会より

■ 著作図書案内・書評・海外シンポジウム参加報告記事募集

ニューズレター(NL)委員会では、次回29号(2016年6月発行予定)掲載記事として、会員の皆様の著作図書案内、海外シンポジウム参加報告、震災関連や多文化関係学会に関連した研究、関連学会参加報告記事などを募集しております。以下(1)から(3)の記事をNL委員会に送ってくださいますようお願いいたします。

募集する記事の内容

(1)学会の趣旨に関連すると思われる著作・訳書などを出された場合

募集対象とする著作の発行時期:2016年1月から2016年4月末まで

書名、著者名、出版社名、出版年、総ページ数と本の内容を200字以内で紹介

(2)学会の趣旨に関連すると思われる著作で、会員に広く紹介することが望ましいと思われる場合

募集対象とする著作の発行時期:2016年1月から2016年4月末まで

書名、著者名、出版社名、出版年、総ページ数と本の書評を200字以内でまとめる

(3)学会に関連する海外のシンポジウムや震災関連のシンポジウム、もしくは関連学会に参加された場合

募集対象とする時期:2016年1月から2016年4月末まで

◆記事の送付期日:2016年5月6日

◆記事の送付先:NL委員会 守崎 誠一宛(morisaki@kansai-u.ac.jp)

■ 関連学会の大会紹介記事の募集

会員に紹介するのにふさわしい関連学会の大会情報を随時募集しております。具体的には、(1)学会名、(2)大会名、(3)大会テーマ、(4)大会日時、(5)会場、(6)その他詳細(120字以内)をお書きのうえ、NL委員会委員長の守崎誠一宛て(morisaki@kansai-u.ac.jp)に送ってくださいますようお願いいたします。

会員新著紹介

■ 『コミュニケーション研究のデータ解析』

著者:田崎勝也(編著)

出版社:ナカニシヤ出版

出版年月:2015年9月

総ページ数:240頁

内容:コミュニケーション学を中心に、社会科学や人間科学の諸領域で量的な調査や実験を行いたいと考えている大学院生や研究者に向けて書かれた本です。統計処理における理論と実践のバランスを考慮し、各章とも前半では分析をするに当たって知っておくべき統計学の理論に触れ、後半では実際のデータ解析を通してSPSSやAmosなどの統計解析ソフトの使用法や結果の解釈をわかりやすく解説しています。

■『日本とイスラームが会うとき:その歴史と可能性』

著者:小村明子

出版社:現代書館

出版年月:2015年9月

総ページ数:316頁

内容:十数年以上にも及ぶフィールド調査・文献調査に基づき、異文化理解、異文化コミュニケーションの視点から、日本におけるイスラーム受容の歴史とその現状について初めて本格的に論じた書籍である。文献調査や聞き取り調査により日本におけるイスラームの歴史を明らかにした。また日本人改宗者への聞き取り調査を踏まえて、イスラームという日本人になじみのない宗教文化について、日本人が如何に知り、理解していくのかを考察した。

関連学会案内

■日本コミュニケーション学会 第46回年次大会

会期:2016年6月11日(土)、12日(日)

会場:西南学院大学(福岡市早良区西新)

テーマ:コミュニケーションとパワー

.....

学術講演者にUniversity of UtahのKent Ono教授を予定。同時期にInternational Communication Association (ICA) の大会が福岡でおこなわれるため、何らかのセミナーなどを共同で行うことを計画中。

編集後記

今回のニュースレターから紙媒体での発行をとりやめ、全面的に電子化による発行に移行いたしました。紙幅の制限がなくなるとともに、カラーの写真などこれまで掲載することのできなかつたコンテンツも掲載できるようになりました。今後、ますます充実したニュースレターになるように努力していきたいと考えています。

6月に発行予定の次号NLでは、次回大会(佐賀大学開催)の内容についてより詳細にお伝えする予定をしております。それまでは、学会ホームページの情報をご確認ください。

(NL委員会:守崎誠一・内藤伊都子)